参加報告書

所　　属　中体連
氏　　名　二宮　光司

＜講習会・大会名＞　第31回都道府県対抗ジュニアバスケットボール大会2018
＜期　日＞　平成　３０年　３　月　２８　日（水）　～　平成　３０年　３　月　３０　日（金）
＜会　場＞　東京体育館、　越谷市立総合体育館、　上尾運動公園体育館、　市川市国府台市民体育館
浦安市運動公園総合体育館、　横浜文化体育館、　川崎市スポーツ・文化総合センター
＜参加者＞　各都道府県帯同審判員、中体連上級審判員、関東派遣審判員、本部審判員等　約２２０名
＜講　師＞　蒲健一氏、関口久視氏、御手洗亮氏、田邊真由美氏、星野由貴氏、武藤陽子氏、
他中国・近畿ブロック上級審判員６名
＜内　容＞
○３月２７日（火）　審判研修会
午前中は３ＰＯメカニクスの習得とガイドラインの理解について簡単な講義と分解練習を実施した。
１　ガイドラインの理解と確認
・ブロック or チャージ
・プロテクトシューター
・フェイク

上記の３点について、Ｂ・Ｉは笛が入らないケースがないように判定することや、ショットに対して最後までスペースを詰めていくような守り方を見極めるよう指導があった。また、今大会はレベルの高い選手が集まることも有り、フェイクについても「中学生だから」と考えずWarning やＴＦもきっちりと処置していくよう講話をいただいた。

２　３ＰＯの基本的なメカニクスの確認
・プライマリー
自身のプライマリーから始まったプレイについては最後まで確認をして判定をする。（特にＴ・Ｃ）
プライマリーにはエリアとアングルがあり、遠くてもオープンアングルであれば判定に加わっていく意識と準備が必要である。（セカンダリーの意識）

・ボールサイドツー
ボールサイド＝ストロングサイドを作ることを心掛ける（オートマティックに）
１人で見るより、２人で見た方が見えないものが少なくなる。

・ローテーション
ローテーションの基本はリードがイニシアティブをとる
①リードはセットアップポジションを基本として、ミラー・ザ・ボールの位置をとる。

②ミッドレーンにボールがあるとき　　→　クローズダウンポジション
③ボールがウィークサイドの移動する　→　ローテーションを開始
（Ｌはスキャン・ザ・ペイント、Ｔはピック・ザ・ペイントしつつ同時にＣへ）
④Ｃはアクティブな１対１があればキープし判定を続ける。

今夏の山口全中は２日目より３ＰＯ実施となるため、基本的なメカニクスについて実際のコートを使用しての説明があった。様々な情報や言葉が流れてくるが、やはりローテーションの連携など基本的なところを大切にしてほしいとのことであった。

３　ケーススタディ
・４ｓラン
・ハーフコート５on５（ローテーション）
・ハーフコート５on５（ハイピック）
・オールコート５on５（１往復半トランジション）

午後は高校生男子を使用してモデルゲームを行った。
モデルゲーム　甲南－日大豊山
ＣＣ　大野哲広(奈良新規Ｓ)　Ｕ１　報告者　Ｕ２　本部和史(宮崎Ｂ)
３ＰＯの経験がほとんどないクルーであったので、ローテーションや時間の管理など基本的な事項のみ確認してゲームに入った。主任の御手洗氏からはクルーとしてローテーション等は全く問題がなく行われていた。個人的な部分では３ＰＯメカニクスに対する理解はとてもよいが、今後はリードの時のローテーションの必要性をもっと考えてから行うとプレイにマッチすると指導をいただいた。プレゼンについてはよく勉強しているとほめていただいた。今後の課題はボイスを使って、デッドボールオフィシエイティングをする習慣をつけていくともっと良くなるとご指導いただいた。(シューターの番号や本数、クロックの秒数など)

○３月２８日（水）　男子予選リーグ　東京Ｂ　４９　対　６６　愛知
主審　望月公平氏（広島Ａ）　副審　報告者　主任　山口憲昭氏（福岡新規Ａ）
プレゲームでは、長身選手が多いのでインサイド中心の展開になる可能性が高く、２ＰＯでのリードのスイッチサイドについて確認した。また、２ＰＯの場合だと確認が難しいスペース（３、４エリアから６エリアにかけて）のお互いの分担についても話し合った。また、個人として前日に指導いただいた、ボイスを使ったデッドボールオフィシエイティングへの挑戦も意識してゲームに臨んだ。
ポストカンファレンスでは、長身選手が多かったが、インサイド中心よりはドライブが多くなってきた段階で、２人で再確認をして見方や分担を変更した方がよりアジャストしたのではないかと指摘があった。クルーとしての連携協力については、主任、講師ともに非常に良かったと言っていただいた。
個人の課題としては、リバウンド後のショットに対して、明らかな影響が出るまでもう少し我慢してみる勇気を持ってほしいとアドバイスをいただいた。

○３月２９日（木）　女子準々決勝　　東京Ｂ　７４　対　９２　千葉

主審　小出聡子氏（京都新規Ｓ）　副審　報告者　主任　澤野卓朗氏（青森Ａ）

最終日のコートをかけての対戦となるので、どちらも初めから激しくプレイをしてくる可能性があるのでゲームの基準となるテンポセッティングを意識するように確認した。また、長身選手が多いのでリードでの右側への移動は、インサイドでの攻撃がはっきりしている場合や、３対３以上のマッチアップになった時だけにしぼり、２人のボクシングインがなるべく崩れないように確認した。また、ブロックショットなどをしっかり判定し、いいプレイを切ることがないよう確認しゲームに臨んだ。

ポストカンファレンスではドライブに関してのＤＦのコンタクトにもう少し笛を入れてよいケースが前半に見られた。女子特有の、最後に面が変わることも考慮してリードのポジショニングを工夫すれば判定できたのではないかと指摘を頂いた。リバウンド争いでの手の絡みに対して、プレイに関係ない状況でも早めに笛を入れた方がよかったと反省した。

＜所　感＞

今大会を通して、現在の日本国内の３ＰＯへの移行や、プレゼンテーションの大切さ、メカニクスなど様々なものがどんどん変化していく中で、昨年のえひめ国体や県内、ブロック内での研修会で上級審判の方々から教えていただいた情報のありがたさを感じることができました。特に『声』を使うことに関して、どのような場面で、何のために使うのかを考えさせられる大会となりました。これまでの取組を生かしながら、改善できることはどんどん挑戦していきたいと思います。そして、習慣化するためにもどのレベル、カテゴリーの試合でも続けて取り組んでいくことを心掛けて審判活動を行っていきたいと思います。また、県内の審判へも持ち帰ったことを広めていきたいと思います。

今回、このような機会を与えていただき本当にありがとうございました。

以上、報告致します。

なお、この報告書が、審判委員会ホームページ等に掲載されることを了承します。